

一、前言（台湾生重機中隊兵の面々）

1945年3月、入学と七星寮入寮を済ませて間もなく、全校生の学徒兵徴集令が下った。一先ず本校舎の教室が仮兵舎となり、寮生は折角入居したばかりの学寮から移住させられ、そこで部隊編成が行われた。その結果、全校生のうち約五十人が、台北高等商業から来た約同数とあわせて重機関銃中隊が成立、それに私が配属された。

約五十人の同校生のうち、台湾生は理乙二年生四人（王源、洪祖培、王万居、周随土）理甲一年生一人（劉建祥）、理乙一年生二人（溥彩沂と私）である。この内、溥彩沂君は、初めから痔の病で、練兵休になり、実際に兵舎を共にした覚えが無い、そして、アメリカに移民した周随土さんと同様に現在連絡がつかない。王源さんと洪祖培さんは夫々地質学と精神医学の教授で定年退官され、目下農芸化学からやはり定年退官した私同様、台湾大学名誉教授として余年を送っている。学部は違うが、両先輩とは同じ大学に定年になるまで奉職した関係で、実懇とは言えなくても、氣息相通ずる仲と言えよう。王万居さんは開業医として、三峡にお住まいであり、同窓会でお目にかかることがあるが、劉建祥君は屏東に退隱の生活を送られており、大学在学以来お目にかかったことが無い。この度、学徒兵重機中隊の有様を文字にして残すべく、かつての戦友に呼びかけるに当たって、私が先ず呼びかけたのは、王源先輩である。王先輩の奥方は家内の三高女一期先輩であり、また家内が台湾大学植物学科在学中には、植物生理学教室の事務官を勤められた方で、私たち夫婦でご一緒のお付き合いをして戴いており、また学校給与の官舎で、近所で一緒に住まう事半世紀にわたっている。王先輩は快く、連絡のつかない周随土さんを除いた同期の方々に呼びかける事を引き受けられた。私の分担は当然溥彩沂、劉建祥両君への連絡になるが、溥彩沂君は台湾電力を退いたあと、中原大学(キリスト教私大)で教職についたはずだが、名簿に載っている連絡要項では全然要領を得ない、つまり電話は鳴っても人が出てこないのである。ところが、大学在学以来お目にかかったことが無い劉建祥君は、直ぐに電話に出て来られて、要請事項を承諾された。従って、機関銃中隊の台湾勢からは、五名の寄稿が可能になると思う。

さて、六十年になんなんとする過去を振り返ってみると、生涯の歴史に於いて、非常にインパクトが強かったのにもかかわらず、学徒兵の半年はその詳細を辿る事を得ない。只、深く印象に刻みこめられた事象のみ、一こま一こまの絵のごとく、思い出せる。以下その断片的な、事象を綴っていくことにする。

二、部隊編成と武器の配置

中隊長、小隊長などは本校と関係の無い者ばかりで、私の属した小隊の小隊長は関東軍からきた原口軍曹であった。確か日魯漁業に勤めた事があったと聞いた様に覚えている。中隊長は中尉で、片手(確か左手だったと思う)が戦傷で肩の付け根からブラブラしていた。もう二人の小隊長は、見習い士官上がりで、しょっちゅう中隊長と行動を共にしていたとしか覚えていないが、私の目から見て、本当に戦争で指揮官として役に立ちそうに思えたのは原口軍曹だけであった。

一個小隊は三個分隊から成り立っていたと思う。つまり一個中隊は九個分隊で編成され、一個分隊に一挺の重機関銃が配置されたようである。こういう基礎的な数字すらあやふやであるのは、やはり歳のせいである。空冷式の機銃は九なんとか式と番号で命名されており、確か一分間 450 発の発射速度であった。銃身と基座に分解されて肩に担いで搬送できるが、両方の重さは合わせて約 50 kg。銃弾は、弾夾板に 30 発ずつ詰め込んであり、連続射撃をすれば、4 秒で空になるので、装填手が射撃手の傍で絶えず装填しなければ、それ以上の連続射撃が出来ない。半年の兵隊生活の間、この機関銃の実弾訓練をやったのは一度だけであるが、そのときは弾夾板の上に並んでいる銃弾を三発ごとに一発間引いて連続発射を止め、「三発点射」という節約した射撃法で三十発で一訓練を終わらせたように覚えている。つまり非常に銃弾が不足していたのである。結局一挺の機銃に対して配られた実戦用の銃弾は、弾薬箱にして、二つか三つぐらいで、果たして五分の連続射撃に堪え得たであろうか。本当の戦争になったら、我々は五分に満たない応戦力しか発揮できないと、軍の上部から踏まれていたのかもしれない。

三、部隊駐屯地

我々の駐屯地は三つに分けられる。即ち樹林口、本校舎と汐止であるが、私には別に板橋の分遣隊作業場と板橋陸軍野戦病院で生死の境を彷徨した二場所を加えなければならない。

これ等駐屯地は台北盆地の中に点在するが、その内、樹林口と汐止は夫々盆地の西北と東の縁辺にあり、本校舎のある古亭町と板橋は夫々盆地を縦断する淡水河の支流新店溪と大科崁溪の辺に位置する。汐止の古名は水頂脚と云い、汐止は日本式に改名された後今日も使われている。樹林口は普通林口とも呼ばれ、台北盆地の西側を囲む桃園台地の上にある村落を言うが、その北端から海に丘陵が落ち込んだ先に、八里庄という小さい漁村があり、そこがアメリカ軍の上陸地になるかもしれないと、予想されたようである。八里庄はまた背後に海岸線に沿って長く聳える観音山を背負い、その観音山は広い淡水河の河口を隔てて、淡水の町と相對する。

(1)樹林口：

特攻機の墜落：

此処では手ぶらで、演習もなく、専ら戦車壕の掘削作業に使役された。棲家は二つの稜線にはさまれた浅い谷間に設営された、竹骨茅葺の仮兵舎である。竹棚の上に藁を敷き、その上に毛布を被せたのが臥所であった。林口台地に設けられた、特攻基地飛行場のそばにあったため、ここに移住して直ぐ始まった沖縄戦に合わせて、夜中に帰らぬ任務に飛び立つ特攻機の爆音が増え、それを昼間の作業で疲労困憊した夢うつつの耳にも認識しえて、感慨無量であった。そして、ある夜、突然天地をひっくり返すような物凄い爆発音に夢を破られ、朝になって行って見たら、兵舎から程遠くない谷間に、索敵ならず、帰還してきた特攻機が恐らく滑走路を見誤って墜落し、大きな穴を開けてそれこそ粉骨砕身、機身も跡片無く、只アルミの骨みみたいな特攻機の部品が散乱していた。

瞬発爆弾攻撃：

或る日我々が八里庄の浜辺から上がってくる坂道の切れた樹林内で戦車壕掘削作業をしている間に、飛行場をめがけての空襲があった。距離的にだいぶ離れていたもので、空襲の激しさは作業現場では感じられなかった。その被害状況の一部は作業を終えて帰營の途上に見られた。小さい落下傘に吊るされた瞬発爆弾が多く投下され、その落下傘が道端の相思樹に数多くぶら下がっていた。その下に掘られている蛸壺に避難していた兵が、頭上から降ってくる破片にやられて死亡した模様である。道端には蛸壺から引き上げられた遺体が未だ収容されずに横たわっていた。そしてその傍に硬直した四肢を虚空に向けて伸展した牛の屍骸が大きく目に写り、それに比べて戦死兵の亡骸が如何にも悲しく小さく見えた。その翌日、牛肉のかけらが入った給食があったが、その腐敗臭と共に、脛に浮かんだ戦死兵の姿が食欲を完全に殺いでしまった。

戦車壕掘削作業：

林口台地は赤い酸性土壤に覆われている。我々の作業地は、松と相思樹の混合林の中にあった。この林の中に約二十メートル幅の空き地を切り開き、そこに幅十メートル深さ二メートル余りの溝を掘るのが仕事であった。堀手と土運びの仕事を分担するが、私の記憶では、専ら劉建祥君と二人で、担架式のモッコで運搬の仕事をやらされた。劉建祥君は大変生真面目な人である。彼の仕事振りには一心不乱の気概があった。それに、私は体力的に就いていけなかった。その為に、仕事のテンポを少し落としてくれないかと頼んだ覚えがある。食事は、毎食飯盒の四分の一の飯に、しまほろ菊の塩汁の定食で、到底十六歳の栄養需要を満たすものではない。入隊前に姉が造って持たせてくれた胡麻塩が唯一の補充食材であった。

昼休みの間、地に倒れている松の樹幹の上に身を横たえ、直ぐに眠りに陥り、しかもその丸太の上から転げ落ちる事も無かったのは、まさにいかに疲労

困憊していたかを物語っていたといえよう。

以上が樹林口における、記憶の断片である。ここから我々は次の駐屯地汐止に移動するのだが、その中継ぎに台北本校の教室に宿営し、そのときに台北の大空襲に見舞われることになる。

(2)台北本校校舎

台北に移動した際、編成替えがあった。そして、私は指揮班に編入された。指揮班には滝沢寿一、小山捨男、大田頼常の諸先生が配属しており、滝沢、小山両先生とは一緒に寝起きする事になるが、大田先生は見えておられず、そのうちに海軍の天然ガス研究所に移られた由。小山先生はいつも英語の詩集を手にしてをられたように思う。滝沢先生は御自宅から自転車を持ってこられ、本校から市中心の高商にある大隊本部へ伝令に出る者の利用に供せられ、汐止に移動後は、御自分で松山への蜆の買出しにお使いになっておられた。

本校校舎では、教室のコンクリート床に畳を敷いて寝室にし、衛生設備は校舎のものが使えたので、学徒兵召集中では最高の宿営設備に恵まれたと言えよう。この本校舎において、或る日、入鹿山さんが脇差（大刀ではなかった）を抜いて手入れをしていたのを、傍で見ていた事を覚えている。

そして此処で五月三十一日の大空襲に出っくわした。そのときの経験は今でも深刻な思い出になっている。

台北大空襲

沖縄戦も終わりに近くなると、台湾への空襲も頻繁になる。そして地上、上空共に抵抗が殆どなくなると、艦載機による銃撃だけでなく、真昼間からB24が悠々と編隊を組んで、恣に爆撃するようになった。五月三十一日の空爆は台北市の南は台北第一中学の辺りから、北は台北駅の辺りまで、密集して半トンから一トン爆弾をばら撒いていった。

記憶に残る弾痕をたどれば、一番南に落ちた爆弾は、本校舎東側の「池の端荘」の傍にそれこそ池のように大きな弾孔を残した一トン爆弾であろう。一中の校舎は講堂が直撃で潰れ、その東側の南門市場、酸素会社まで被爆している。一中のまん前にある建功神社は丸つぶれになり、そこから飛んで法院、総督府、台湾銀行、総督府図書館、総務長官官邸、度量衡検定所が密集して被爆、そして台北駅の直撃で止まった。

爆撃が始まったとき、我々は、出来るだけ掩蔽の良い場所に隠れろと言われた。防空壕よりは、校舎の階段下が一番安全だろうと思ってそこに隠れた。上空を飛ぶ爆撃機の爆音は、それ程響かない。投下されて、地面に向かう爆弾の落下音は、最初は恰も砂利トラックが、一気に荷台を傾斜させて満載の砂利を降ろす時に、発生するジャーという音に似ている。それがヒューという音に

変わり、それが消えると爆発音と地響きが伝わってくる。もしも直撃を食ったら、恐らくこの瞬間に音も地響きも感ずることなく、木っ端微塵に吹っ飛ばされている。爆撃は南から北へ移行して往ったので、校舎の辺りに始まって、段々遠ざかっていくように感じられた。

爆撃が収まって、私は大隊本部への伝令に出された。滝沢先生が自転車を貸していただいたのだが、これが反って重荷になった。道順は勿論校舎前の通り(今の和平東路)を西に行き、南門市場と酸素会社の間にある通り(今の羅斯福路)を北に東門に向かう。それが羅斯福路に入るや、爆撃によって飛散した瓦礫が路を覆い、自転車を担いで歩かねばならない。三線道路に近づくと兵營に沿って建てられた民家に直撃、そこで犠牲者掘り出し作業のいろんな掛け声が聞こえ、そこから東門までの路は全く掘り返されたようであった。東門に至ると、なんと総督府正面一帯がそれこそ瓦礫の山となっていた。総督府は正面に向かって、塔と主体部の左側の付け根の部分が、一部切り取られたように無くなって、そこから黒煙が揚がっており、その左右に在る法院と台湾銀行は部分倒壊、道を挟んで総督府と相対する総務長官官邸と度量衡検定所は完全に姿を消していた。総督府の西側にあった図書館も姿を消したのだが、東門側からはそれは見えなかった。揚がっていた黒煙は、或いは図書館からだったのかもしれない。とにかく、その惨状は被爆者救助の掘り出し作業から聞こえる叫び声とあいまって、いっそうの悲哀を招いたように覚えている。

私の出身中学北四中から一緒に理乙に入学したのに下地正雄君がいる。下地君の家はこの爆撃で直撃に遭い、息子二人を招集に送り出し、一人で留守宅を守っていたお母さんが亡くなられた。戦後に下地君に会って、弾痕だけになった家の跡に、鶏が駆け回っているのが何ともやりきれなかったと聞かされたとき、あの日人影が全然なかった総督府前の爆弾に掘り起こされた荒廃ぶりと、遠くから聞こえる救助作業の掛け声に合わさって、その鶏をこの目で見たような錯覚を起こしたものである。

(3) 汐止

爆撃の直ぐ後、中隊は汐止に移駐する。汐止国民学校の校舎に、沖縄からの避難者達と隣り合わせに住んだと覚えているが、定かではない。汐止で記憶に残る事柄は次のごとくである。

滝沢先生の炊事班長勤務：

汐止は農産物の多い街であったので、食糧の給與は樹林口のとくに比べてよい筈であったが、それが一向に改善されなかった理由として、中隊長と二人の幹部候補生上がりの小隊長が、汐止駅長の娘に懸想をし、我々の食糧給與をそのほうの貢物に流したとする説がある。滝沢先生が中隊長に睨まれたとする説もあるが、それが本当なら、滝沢先生が自ら炊事班長を買って出て、この不

正の是正に努めたからであると思う。私は滝沢先生が早朝自転車で松山まで出かけて蜆を購入し、それで蜆汁を作って我々の朝食を豊富にされたのを、指揮班で寢室を共にしたので、よく知っている。滝沢先生のこの挙動は、少年の私に深い感銘を与えた。

蛇の焙り焼きと胡瓜の生齧り

作業地の付近には竹藪が多く、青蛇をよく見かける。これ等の蛇は、我々に見つかり、スコップで挙げた鎌首をたたきつけられ、皮をはがれて焙り焼きにされ、食われてしまう。作業は分隊ごとのトーチカ造りであったので、指揮班にいた私は滅多にこの特殊給与にありつけなかったが、一度連絡の途中に出くわして、この特殊作業に加わり、初めて「ながむしやき」を一切れ味わった。

兵舎と工事現場へ往来するのに、わりに大きな農家の前庭を通らねばならぬが、或る日そこで、畑から帰ってくる農家のおばさんに出会った。台湾語で挨拶したら、かねてから近所で蛇狩りで騒いでいるので、学徒兵は飢えていることを知っていたようである。ちょっとお待ちと言って、庭続きの胡瓜畑から胡瓜をもいできて、すばやく手にしていた鎌で皮を斑に削り、台所に入って塩を擦り付け、さあお食べと渡してくれた。その胡瓜の味の良さと、一時満たされた満腹感は忘れられない。

初めてにして最後の重機射撃訓練

汐止で初めて空冷式の重機機関銃が部隊に届いた。その分解と組み立てを教えられ、それを五指山の麓に設けられた射撃場に担ぎ上げ、そこで弾薬装填と射撃訓練が行われた。一つの弾夾板には、三十発の弾が挟まれており、その射撃が終わるのに合わせて、弾薬手が新しい弾夾を装填しなければ射撃はそこで止まる。私は弾薬運搬の役割であったので、訓練のときは、銃身と脚架に分解され機銃の運搬作業の分担だけであり、射撃のときは、後ろで伏せて、見学をただけである。そのとき覚えた術後に「点射」がある。点射の意味は前に述べたが、結局この一回だけの訓練は、点射を、ごく少数の射撃手に行わしめただけで終わり、例えば銃の照準修正とか、学校教練で小銃について詳しく教わったような内容はなかった。この訓練では、肩に食い込む二十数キロの鉄の痛い重さの記憶だけが残った。

、 (4)板橋分遣隊と板橋陸軍野戦病院

七月に入り、板橋に作業分遣隊を派遣する事になり、私はそれに編入された。河底から砂石を取り、臨時に引かれた鉄道の貨車に積み込む苦力的な仕事である。目的地に着いたらそれを下ろす仕事をするのが有る筈だが、それは何処で誰がやっているのかは我々には判らない。入隊してより四ヶ月が経ってい

る。栄養不良の兆しは既に現れていた。そういう体調で、猛暑の中での重労働が非常にこたえた。そしてやがて、悪性マラリアに感染した。どういうようにして、板橋国民学校に設置された野戦陸軍病院に運び込まれたかは、全然記憶に無い。気がついた時は、ただ呆然とコンクリートに敷かれた畳の上から、屋根の下に張り巡らされた支柱の骨組みをながめ、まだ生きていたのだと涙が出そうになった。

私は台北四中三年の時に、同じ下宿に住んでいた温幸昌君という同窓生が、悪性マラリアで死亡する過程に付き合った経験を持っている。台北四中は台北帝大付属病院澤田内科を校医としていた。温君の病症が只ならぬ者であったので、発病二日目の夕方、下校後に人力車を雇って付属病院に担ぎ込み、その夜は病院に泊り込んで、看護の手伝いをした。既に意識不明で、看護婦が注射するのに、私が押さえ込まねばならない状態であった。その翌朝早く登校して報告し、花蓮港に住む親元に連絡を取ってもらった。その日の夕方病院を訪れた時は、既に顔貌が温君そっくりの親父さんが病床に付き添っておられた。温君は青い眼とコーカサス系の異相もっていた。大学付属病院で入院治療を受けたのにも拘らず、彼は五日位でこの世を去った。告別式で、彼を一回り小さくしたような、しょんぼりと佇んでいた彼の親父さんの姿には、児を失った親の悲しみが、すっぽりとかぶさって居たように見えて、私は全くやりきれない思いがした。

野戦病院の畳の上で目覚めた時、俺は生き延びて、親不孝を免れたという喜びが湧き上がったのが、それが生々しい記憶として残っているのは、温君の死亡が深く体験に刻まれていたからであろう。

この野戦病院での経験で、いまだに記憶に残っている事項を述べてみよう。

野戦病院での病床の割り当ては、入院の原因によって区別される。マラリアは戦傷に等しい一等病であるので、同じ病室に居た古参兵達に、質の悪いのは居なかった。何しろ私は最年少の学徒兵である。どちらを向いても上官ばかりである。こういう所で意地の悪い古参兵がをったら堪った物ではない。然し、同じ病院内には、質の悪い患者も居る。看護婦が親切にそういう患者の居る病棟を教えてくれ、医務室に行く場合、そこを避ける道順を教えてくれた。

質の悪い患者の最たる物は、花柳病で入院した連中である。或る日、医務室に呼び出され折に、医務室の一角に設けられた特別治療室の前を通った。目の中に飛び込んだのは年取った婦長の前に、列を並んで包帯換えをして貰っている花柳病患者である。婦長は長いピンセットを二本巧みに使って作業をしているが、古い包帯を取り除く時、容赦なく引っぺがすらしく、悲鳴が上げると、「身から出た錆です、我慢しなさい」という、婦長の叱責が聞こえた。こういう患者は当然看護婦に振り向きもされないので、看護婦が親切に扱う一等病患者を快く思わない。そういうトラブルがあったらしく、私が医務室に出る用事があるようになった時、看護婦が付き添って道順を教えられた次第であった。

病院の給食は部隊に比べると遥かに良かった。そのお陰で病後の体力回復が、自分でも驚くほど感じられた。然しながら、退院時の体重が40キロしかなかった事から、最低体重がそれより少なかったと思われる。入隊時の体重は60キロ以上は有ったのだ。私は三、四ヶ月の間に体重の三分の一以上をを失ったことになる。この学徒兵体験が体に及ぼした影響が、いかに甚大であったかは、戦後体重が60キロに復帰するのに、約二年もかかった事で察しがつく。

入院中に「恩賜のタバコ」なるものが配給された。まだ満十七歳にもならない未成年者だから吸わないと言ったら、古参兵で「恐れ多くも、恩賜のタバコだ、それに兵隊になったからは、未成年は理由にならない」というのが出てきて、結局吸わされることになった。ところが、一口二口で眼が回る思いになり、ひっくり返ってしまったのに周りが驚いて、それ以上の強要はされなかった。これが生涯初めての喫煙であった。

この入院で命は取り留めたが、私は一生涯難聴を背負い込んだ。当時おそらく軍隊にしかなかったマラリアの特効薬、キニーネ、アテブリン、プラスモキンの投与により救われたのだが、その副作用として耳が遠くなったのである。また、アテブリンとプラスモキンの黄色に染められて、それこそ「黄色人種」として約半年を過ごした。学習する立場で講義が聞きづらいのは、本を余計読む事でおぎなえるが、会議などでは補聴器を使わなくてはならない。1980年代に私は国家科学委員会の国際合作処長を三年勤め、その間に、アメリカ、ドイツ、イタリー、フランス、ノルウエー、南アフリカ、日本等との学術交流事業を多く執り行ったが、その時の交渉事務は補聴器に頼らねばならなかった。その時使った旧式補聴器は今でも結構役に立っている。然しながら、教師として教壇に立った場合、私の講義は声が大きいの、学生には受けが良い。最近女房も歳のせい、耳が遠くなり、ようやく家内における音量平衡が良くなったようである。

四。終戦から除隊まで

野戦病院から作業分遣隊に戻されたことは覚えているが、其れから終戦と除隊までの経過は覚えていない。

ふらふらの状態であったが、一応マラリア病原虫は退治したと言うので、原隊復帰を命ぜられた。戻った先は汐止ではなく、板橋の作業分遣隊である。驚いたのは、入院中に、飯盒、地下足袋、脚絆等が消えうせてしまった事である。もう終戦だから「員数合わせ」をする必要が無いと思った覚えがあるので、8月15日は入退院と原隊復帰の期間にあったと思われる。だから玉音放送を整列して聴いたとかいう様な覚えはない。うろ覚えに残っているのは、除隊式は本校校舎で執り行われ、その時一等兵に進級を布達されたように思う。

其れから私の新しい人生の幕開けになるのだが、学徒兵としての経験がどれだけの影響をもたらしたのか、これから探求するのも面白いと思う。